

もど子と人婦

第五卷第三號

けだもの會議

やまとの翁

さて、前に申しました通り、虎
 だの、猿だの、犬だの、議論が
 出て、夫に賛成するものだの反
 對するものだのも澤山出ました
 もんですから、會議が、丸で、
 がやくになつて仕舞つて何が

何やら、さっぱり分らなくなりましたから、會長の象も、どうしていゝやら、殆んど困ったといふ風でありましたが、暫らくすると、向ふの方から、

「會長々々、緊急動議があります」

といつて立つた者がある、誰かと思つて見ると、夫は野猪の親類の豕でありました。

「え、前程から承はりますと、いろいろの御名論が出まして、一向相談がきまるといふ譯に行かないのは、とりも直さず、各自、自分の都合のよい方に許り考へて議論するからで、即ち自分の田に水を引く事許りやっているからだと考へます。そこで、私の考へますには、之は、吾々仲間で、この様に議論して居て

は、何時まで、たつても決まらないと思ひますから、一層、他
 の社會のものを呼んで來て決めて貰らつては、どうでせう」

會長なる程、夫はよいお考へだ、皆さん、今の豕君のお説に賛成の
 方がございますか」

と聞くと、皆夫に賛成しました。そこで、誰を呼んで來ようかと
 云ふ相談になつた。すると、鳥だの、魚だの、虫などの様なもの
 に來て貰つては、どうもけたもの社會の名譽に關はるといふので、
 またいろいろ議論があつた末、とうとう會長の象が發議して

會長では、どうです、一層人間の中で、誰かに來て貰つては、人
 間である、と、別段に吾々の利害に關係しないから、極公平に判
 斷して呉れるだらうし、又吾々の名譽にも關係しないでせう」

といふと、大勢は「夫で宜からう」といふので、とうく人間に來て貰ふことに決りました。

そこで、誰が使に行くかといふと、駈けるのでは一番だといふ馬が行くことになりました。

そこで、暫らくの間は休憩といふので、皆席を離れて水を飲んだり、草を食ったりして、一時間許りたつと、お使の馬が、一人の人間を乗せて、タツタツタツと駈け戻って來ました。

そこで、象が直ぐ面會つて、委細の譯を話して、さて大勢のけたものに紹介しますと、其人間は、席の眞中に立って、

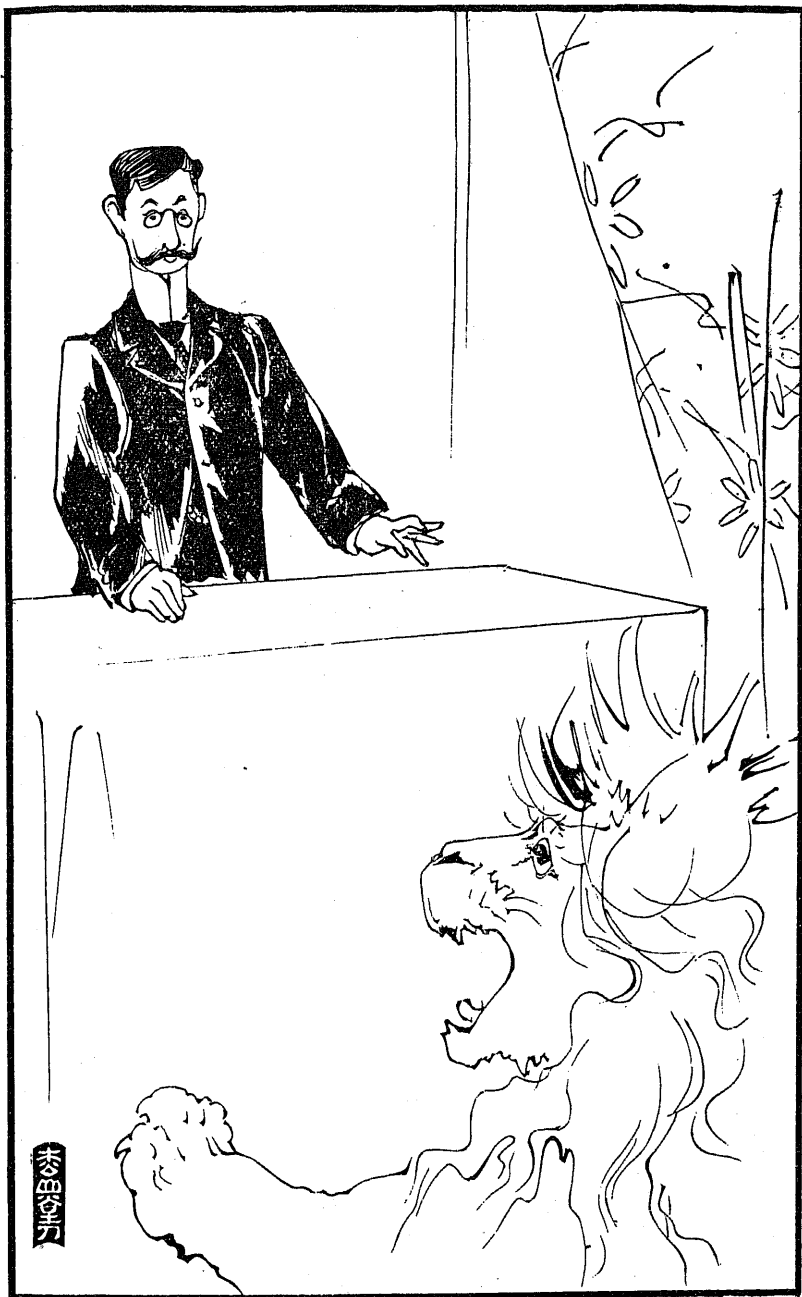
人間では、皆さん、折角のお頼みですから、之から私が一つ、今晚の問題を決めようと思ひます」

と、挨拶しますと、今迄騒いで居た連中は、忽ち静まり返って、ひっそりとなつて仕舞つた。すると、一方の隅から山も破れる許りの大聲で

「一寸、質問する」

と怒鳴り出したものがある。其聲の凄いことと言つたら、中々前の虎どころの騒ぎではない。大勢は、何者だらうと吃驚してふり返つて見ると、最初から、眠つて居たかと思ふ程、一言も言はなかつた獅子でありました。皆さんも御承知の通り、此獅子は、昔から獸の王といはれて居るのでありますから、大勢は、「さて何事であらう」と謹んで聞いて居ると

「今迄、吾々の相談がきまらなかつたといふ譯は、つまり、各自



其標準とする所が一致しないからである。そこで、今改めて、人間君にお尋ねしたいのは、どういふ標準で、吾々獣社會の階級を定めてくれるのか、夫を一言お尋ねして置きたいのであります」

「といて、其ふさくした蠶を一ゆりゆすって、人間をぐつと睨んで立ったのであります。すると、人間は

「夫は、いふまでもない、我輩に頼んだのだから人間の眼で見、人間社會に有用なといふことを目安にしてかよって、人間に一番利益のあるものを上に据えんければなるまい」

といふと、獅子は奮然として

「夫では僕は反對だ」

といつて席に即きました。すると、一方では、第一番に馬が「賛成
 や々」といつて、「僕などは、人間の爲に、どの位働いてゐるか知れ
 ない、第一、今度の日露戦争で、騎兵だの砲兵だのが、あんな勇
 敢な働きの出来るのは、全く僕等の力だからなあ」といふと、其隣の
 牛が「そうとも、僕等は毎日／＼畑を耕やしたり、夫に、身體まで
 人間の爲めに食べさせて居る位だもの、若し僕等がなかつたら、
 人間社會の食べ物が無くなる位だ、人間君の説は尤もの事だなど
 といつてると、豕だの、犬だの、猫だの、駱駝などいふ連中は何
 れも賛成や々といつて居る。
 すると、片隅の方では、鼯鼠だの、鼠などが出て大反對を稱へ出
 しました。先づ鼯鼠のいふには

「僕は、そんなのには甚だ不賛成だ、そういふ側からいはれると、僕などは、たゞ皮が火打袋になるといふ丈けで、其他は畑を荒らしたり、人間に害になること許りだから、一番下になる譯だ、そういふ議論は不公平だ、私は、獅子さんと同様反對です」といふ、すると、鼠だの、狼だの、山犬だのは何れも、夫は尤もだといふ。そこで、議論が、又メチャクけになりかゝった、すると、獅子は

「いや、私の賛成しないといふのは、今鼯鼠のいった様な、そんな簡単な譯からではないのである。一體、最初から、此會議で以て、吾々の階級を定めようとするのが間違つて居ると思ふ。階級などつけて、夫が實際何の爲になるのであるか、第一、夫

が分らないではないか、なる程、吾々仲間の間には、十
 身からだ體の大おほきなものも小ちひさいものも、力ちからの強つよい者ものも弱よわい者ものも、人にん間げんに爲なるに
 なるものも爲なるにならぬ者ものもあるに違ちがひない、然しかし、夫それは各おの自づ、天てん
 から與あたへられた其そのものゝ本もと性せうであつて、何なにも、力ちからが強つよいから上うへ
 に立たつとか、弱よわいから下したになるとか、又また人にん間げんの爲なるに上うへ
 に在あるべきだとか、爲なるにならんから下しただといふべきでなからう。
 つまり、各おの自づ以もつて生うまれた天あま性せうを十分ぶんに盡つくすものが一番ばんよいので
 ある。だから、馬うま君くんだの牛うし君くんだの犬いぬ君くんなどは今迄いま通まり音ねなし
 人にん間げんの爲なめに働はたらいて、戦せん争そうに出でるなり、畑はたけへ行ゆくなり、或あるは門かど
 を守まもるなり、各おの自づの職つとめをして行ゆけば夫それで宜よろしいし、又また鼯むやう鼠そ君くんな
 ども、仕し方かたがない、今迄いま通まり畑はたけの中なかを荒あらして居をればいゝし、

鼠君も、まあベストなどは持つて来ないまでも今迄通り天井で騒いで居ればよいではないか、つまり、皆其職分がちゃんとして天から與へられて居るのだから、何も、夫に上下の階級をつけることもいるまいと思ふのだ」

雄辯滔滔々として演説をした。

前程から黙つて獅子の演説を聞いて居た人間は、此時立ち上つて「諸君、只今の獅子君の御演説は、まことに筋の正しい立派な議論だと思ひます。何も始めから、上下の區別をつけなくつても各自其職分を立派に盡して行けば夫で宜しいので、其職分といふものは、天から與へられたものだから、夫に上下の區別はないといふ議論は、まことに正しいお説と思ひますから、どうで

す、此會議は、此儘で解散しましては、

といひますと、大勢のけだものは、何れも、「贅成々々」なる程、もつともだなど言つて、そこで、とうく、けだものゝ階級をきめるといふことは已めにして、其儘、各自の棲家へ歸つて仕舞ひましたとさ

めでたしく